

命の尊さ、環境への思いやり。  
民謡は全てを教えてくれる文化である。

2008年8月24日(土)、NHK大阪ホールで「日本民謡 ヤングフェスティバル 全国大会」が開催された。今回も全国から30人の若き民謡の歌い手が集まり、自慢のノドを競った。日本でここのけという、若者の育成を中心に考えた民謡大会の意義をあらためて考えてみる。

アマチュアでもプロだと思って歌え！  
コンクールだからこそ、真剣を体験できる。

「日本民謡 ヤングフェスティバル 全国大会」は今年で18回目となる。日本には県単位での民謡大会はいくつもあるが、若者だけを対象にした全国大会はこの大会だけである。その歴史の中で、男性の優勝者は1名だけで他は全て女性だったが、今回の優勝は10年ぶりに男性だった。岩室甚句を歌った愛知県の剣持雄介さんだ。とてもはりのある、きびきびした歌声が審査員の心を捉えたのだ。

今年、男性が優勝したのは偶然ではない。今回から対象年齢を25歳までから28歳までに引き上げたことも大きな要因になったようだ。

「男性は声変わりがあるので、若いうちはなかなかその変化に対応できないの



優勝した剣持さん

です」と主催者である社団法人 全大阪みんよう協会の副理事長 岡川喜与士さんは語る。規定改正の結果が早くも表れたのだ。

民謡を志す子どもたちにとって、すでにこの大会は大きな目標になっている。

「お金もかかるので、コンクールを止めたらどうかという意見もありますが、師匠も生徒もコンクールをめざすことで真剣さがまったく違うんですね。私は舞台上に立って歌う

「日本民謡 ヤングフェスティバル 全国

大会」事業



和楽器演奏集団「独楽」



作州追分を踊る宮坂流津



山銭太鼓保存会のメンバー 全大阪みんよう協会による三味線合奏

以上は例えアマチュアでもプロだと思って臨みなさい、と言います。そうした経験がその後の人生に与える影響は大きいんです」と岡川さん。

確かに、会場も和やかという感じではない。満員であるにもかかわらず、しわぶきひとつできないようなビシッとした緊張感が漂っている。全大阪みんよう協会がコンクールにこだわるのは、その中での経験が芸だけではなく、人間形成にも役立っているからなのである。

民謡がもっと身近になれば、  
日本の明日が救われる。

明治維新以後、それまでの日本の伝統や文化が疎ん

じられてしまった感がある。特に戦後は極端に西洋化してしまっ。以前、三味線は、お茶やお花と並ぶ花嫁修業だった。しかし、「三味線は花街で使われていたせいか、ピアノは上品で、三味線は下品というようなイメージが定着して一般的な楽器ではなくなってしまったんです。民謡もそれに付随して追いやられてしまった」(岡川さん)

学校の音楽教育でも、民謡はほんのわずかの曲を習うに過ぎない。岡川さんはときどき小学校を訪れて、三味線や民謡を教えている。三味線は猫や犬の皮を使うが、それを聞くと子どもたちからは「かわいそう…」という声が返ってくる。岡川さんはそれを機に命の尊さを説く。「毎日毎日私たちは他の動物の命を戴いて生きているん

担当者より



若者の育成に貢献する  
イベントだと自負して  
います。

社団法人 全大阪みんよう協会  
副理事長  
岡川喜与士さん

2年続けてAJOSCにはご助成いただき本当にありがとうございます。おかげさまで2008年度も大盛況のうちに大会を運営することができました。全国の若者に代わって厚く御礼申し上げます。この模様はNHKでも放送されましたが、どうか皆さんも機会があれば民謡に触れていただいて、子どもたちにも伝えていただければと存じます。

だから、その分、一生懸命に生きないとダメなんですよ」  
そういうと子どもたちはうんうんとうなずいているという。

また、ある保護者は「民謡を習い始めてから、子どもが自然に対して興味を抱くようになった」と語っていた。「津軽山唄」でも「刈り干し切り唄」にしても、民謡には自然を愛でる歌が多い。曲調もゆったりとしているから、景色を思い浮かべてかみしめるように歌うこともできる。日本人がみな民謡を歌っている頃は、自然と暮らしはもっと密接だったから、誰もが動植物学者であり、気象予報士でもあったといえるだろう。

「地球環境の問題が叫ばれていますが、もっと自然を身近に感じる必要があるんです。民謡はそのためにも有効です。発声すれば健康にもよい。民謡は日本の明日を救う大切な伝統文化なのです。文部科学省ももう少し理解して欲しいですよ」と岡川さんは嘆く。

民謡という文化を子どもたちに受け継いで行く意味でも、「日本民謡 ヤングフェスティバル 全国大会」をずっと続けていきたいと結んでくれた。